水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

1		塀の中髪を伸ばせて卒業す	米山カロリング
2		百千鳥会話の弾む立ち飲み屋	ささき良月
3	のり子	春眠や部屋いっぱいのドーパミン 身近にはこんな春も訪れている。	檜鼻ことは
4		春うらら君と過ごした五十年	宇田靖之
5		四月や一喜一憂去り出合ひ	衛
6	文猫 暦田	散る桜固き握手の上に乗り 握手の上に花びら、又会おうの握手。誓いの握手を交わす二人。後押しする桜。美しい句。	幸子
7	香 彩風子	春分の月の欠けたるあたり見る 春分と言う季節の変り目、歳の変り目なのに持つ曖昧な変化が中七、下五によく表現されている。春の月と春の夜の気分がよく出ている。	里もりを
8	朝香	多言語でお国自慢や花の宴 現代の日本のお花見の一つの姿ですね。中七がいいですね。	傘張り浪人
9	ひろし 蝸牛 展乎	道すがら上野へ廻る花月夜 気持ち良き夜花の上野に寄ってみる。上野の森の夜桜と皓皓とした月が見える。上野のあたりの夜桜が目に浮かびました。	破れ蓮
10		満開の花を支える枝の黒	しーしー
11	香 癒風子	春雨や眉間艶めく仁王像	彩香
12	楽 原高 城鶴	掃除機の枕に迫る朝寝かな 春をとても面白く詠んでいると思いました。掃除機の音が聞こえてきます。仁王像の眉間に色気感じる作者の感性に感服。	ありぎりす
13		咲くほどは散つてしまへり花の雨	網野月を
14	遊児	その愚痴も三度蛙の目借時 眠くな～る眠くな～る……。	荒一葉
15		落椿花弁散らさず朽ちにけり	森　佳月

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

16	ドジャースの帽子斜めに耕せり		岩本展乎
17	春光や卓球場の赤い髪	赤い髪の人が気になって仕方ない。	新井のり子
18	声高に親を急かせる入学子	新児童がお母さんのを急かせている光景が面白いです。万物が生き生きとする清明、我もまた生気に満ちて。希望に満ちた入学児の姿が見える。	松田素風
19	顔隠すほどの花束春惜しむ	顔隠すほどが良い。卒業式の光景か、季語が効いている。	神谷たくみ
20	明日閉ぢる著莪をひと夜の夢とせむ	花を愛でる心が素晴らしい。	みづる
21	葉桜と　青葉香る　初夏覚醒め		小山哲司
22	デコピンの咥へるボール風光る		新　暦文
23	馴染みなれば田越しに遠見花見酒		高原ひろし
24	花の宿いささか温き露天風呂		遊児
25	ボルタリング手足に春の息吹かな	ボルダリングのゆれる手足に動きが感じられる。温かくなるとボルタリングの季節なんでしょうね。	絵夢
26	田を返し目覚める土の黒々と	自然の命の逞しさを感じる句。きっと今年も豊作でいい米がとれるでしょう。	一駄歩
27	別れ霜未明の報に絶句する		青木鶴城
28	もてなしの心に触れる徒遍路	四国八十八箇所霊場の地元の方々の真心が感じられる。もてなしの様子が見えてきます。春になるとそうですね。	安田蝸牛
29	白少し足してキャンバス春の空	春の空の白っぽい空をよく捉えている。雲が白くなると春ですね。靄ってしている分だけ白の絵の具が必要だ。少し湿度が上がり、淡く霞んで見える春の空の色。白を少し足すことで春の空になる。	くるみ
30	紅枝垂れ妣（はは）の九品（くほん）の浄土かな		光雲2

16			
17	一駄歩		
18	允孝 暮風 蝸牛		
19	米山 破れ蓮		
20	鶴城		
21			
22			
23			
24			
25	かれん 朝香 月を		
26	のり子 凡士		
27			
28	ひろし 素風 鶴城		
29	かれん しーしー 一駄歩 梗舟 みづる ひろ志		
30			

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

31		春の雪近道は坂バス乗り場	和田イチ子
32		春の湖最終走者まつ子いて	いさむ
33	絵夢	春風の車体は子らの絵パッカー車 素材の選び方と対象への視点がユニーク。	小林土璃
34	凡士	クワイ河マーチとともに春の土手 なんとなつかしい曲、おじいさんが先頭に孫を連れての行進か。	石関六弦
35		反りあがる城の石垣山桜	立野音思
36	楽 土璃	雨雫弾きて光る接穂かな とても美しい句だと思いました。「接穂」への着目が新鮮。みずみずしい緑が良く見える。	山川充
37	月を	薄紅を受けし蛇の目や桜散る 桜散る中を蛇の目傘をさしかけているという粋な景であろう。	龍野ひろし
38		施主の名の透けるぼんぼり春祭り	ひろ志
39		目借時富士山麓に鸚鵡啼く 「り」のリフレイン、はんなりの夕桜に共感。ぼんぼり、はんなり、夕桜、普段あまり見ない言葉に惹かれました。	森下山菜
40	しんい 良月	ぼんぼりの明かりはんなり夕桜 堀りに行きたくなりますよね。掘りに来い”が上手いです。おいしそうな筍の絵が浮かんできます。下五の言葉がいいですね。おいしそうな筍の絵が浮かんできます。下五の言葉がいいですね。でかい声が聞こえてくるようです。	俳爺
41	大越 くるみ 朝香 展乎	絵手紙にでかく筍“掘りに来い” 上五に俳味を感じる。	河野凡士
42	絵夢 癒香	風を連れ心地良さげに舞ふ桜 過疎の村里の春、今年も見事に桜は咲いた。	平野楽
43	ひろ志	咲き競い散るを競いて花が征く 「ばさりとは」と「自愛」が響きあってます。破調具合がいいですね。	霜里
44		花まつり天地も人も燃え上がる	秋谷風舎
45	たくみ	ばさりとは散りきれぬ牡丹の自愛	大越マーガレット

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

46	クアックアッと烏姦し樟若葉		朝香
47	惜しげ無く振り払ひしや飛花落花		酒井癒香
48	北窓開く並べ干すスニーカー		かれん
49	春暁や大物釣りの予感かな	多分予感通りに大物を釣り上げたと察します。	かげろう
50	春疾風海の匂ひと万博へ		総太郎
51	遠吠えにそっと筆置く春愁	そっとが良い。春愁の感じがよく出ている。遠吠え、春愁、言葉の雰囲気に惹かれました。	岡崎梗舟
52	湯の宿へ雪解を待ちて峠越ゆ		大束暮風
53	むらさきの筑波嶺はるか葱坊主	宵空の広さかな。風景が大きくて良い。	しんい
54	補助輪の取れて軽やか風薫る	誇らしげな子供の笑顔も目に浮かぶ。初めて自転車に乗れた時の喜びが伝わってくる。幼子の自転車に乗る喜びを上手く表現した。子が成長し気持ちよく自転車に乗っているようです。自転車が上手に乗れるようになった子の笑顔が見える。「軽やか」がいい。補助輪が取れた日を思い出しました。	後藤允孝
55	無音にて道路につもる花いかだ		雪待月田猫
56	若き日に焦がれた街へリラ招く		寒立馬
57	蜘蛛の巣のいつも真中に居る孤独	語らう相手もなく、ただ真ん中に居続けるだけの孤独。映像が静かに立ち上がり、蜘蛛自身に人生の自分を重ねているような詩的措辞に感服。「孤独」が主観の極みでしょうか。平明な詠みで問いかけて来るものがあります。何か都会の孤独を感じます。	岡本たか子
58	青空の飛行機雲と藤の花	青白藤の色の対比が見事。	佐藤幹子
59	君唄へ我は踊らむ花の下	花の下、心通わせる二人の情景が浮かんできます。明るくリズミカルな句で、楽しげな花見客の姿が浮かんでくる。	染谷風子
60	春愁の体は椅子に密着し	身近にはこんな春も訪れている。物憂くて、行動を起こそうとしても金縛りにあったように身動きできない感覚か、感性だけが研ぎ澄まされていくような謎めいた印象。	石川順一

46			
47			
48			
49	寒立馬		
50			
51	米山 暮風 くるみ		
52			
53	遊児 一駄歩		
54	ひろし　展乎 暮風 絵夢 蝸牛 癒香 梗舟 ひろ志		
55			
56	浪人		
57	ことは 彩香 月を たくみ 六弦		
58	かげろう		
59	ことは 風舎		
60	のり子 みづる		

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

61		振動と量子力学花の声	ささき良月
62	浪人 六弦	桐箱にむすめの名前雛納 いろいろ楽しい思い出があるのでしょう。	檜鼻ことは
63		空仰ぎ万緑の待つ土筆かな	大越マーガレット
64	大越 高原	あぎとふの鯉壊しゆく花筏 鯉の大きな口がユーモラス。	衛
65		何年を生きての今日か散る桜	幸子
66	凡士 幹子	大いびき横に聴いてる春の夜 我家は妻が“うるさい”とどなる、するとおとなしくなるようで、私は全く記憶がない。長年付き添うと大いびきにもならされました。何とも長閑な句ですね。	宇田靖之
67		あおとあを境目探す春の空 野原の風にワルツを踊るように舞う二匹の蝶が見える。	傘張り浪人
68	素風	双蝶や野面（のもせ）の風に演舞せり	破れ蓮
69		夜明け前なにも聞こえぬ彼岸かな	里もりを
70	しーしー	春嵐飛ばせあたしをあの日へと そうそう風に乗って時空をも。	彩香
71		くしゃみして涙目眩し花曇り	ありぎりす
72	高原	谷あいの二人静がいいと君	しーしー
73	土璃	肩寄せて九戸一村山桜 山狭の村の遅い春。「山桜」が効いている。	荒一葉
74		花の下カメラに収めた妻の笑み	森　佳月
75	寒立馬	想ひ出に生くる男や花は葉に 未練は男の情念、しかし心の支え。	網野月を

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

76		丸ビルの二階のテラス春の昼	新井のり子
77	土璃 破れ蓮	人見知りせぬ子猫とて貰ひ受く 「人見知りせぬ子」の措辞に、詠者のやさしさと子猫の愛くるしさがにじみ出ている。子猫の愛らしさが感じられる。	松田素風
78		野遊びの子等はいつしか風に翔び	岩本展乎
79		花筏瞑りて近き浄土かな	みづる
80	ことは　かげろう 遊児 暦文 あらか 六弦 幹子	新入りを連れて五月の秘密基地 仲間たちの秘密基地に「新入り」を案内する少しの誇りと、ちょっとした緊張感、ワクワク感が伝わってきます。空き地に土管のあった頃。秘密基地は男の子の初の冒険。新入りは新一年生か、それとも転校生か……初夏の陽ざしの中、小学生の男の子たちが笑顔を交わしながら秘密基地へ向かう姿が目に浮かびます。秘密基地と聞いただけでわくわくします。新学期になり新しい友達ができたのでしょうか。秘密基地は子どもにとって大切な場所だと思います。新人をとっておきの店に連れて行くのは5月ですよね。	神谷たくみ
81	良月 あらか 梗舟 風舎	花筏古城の濠の厚化粧 写生がいいです。筏になると厚化粧です。「厚化粧」という比喩が印象的です。花びらが幾重にも積もり、濠の周りには幾本もの桜が咲き誇っていた情景が目に浮かびます。古城なるがゆえに厚化粧ですか！さぞ桜の見事な古城なのだろう。厚化粧がよい。着飾ったお局の姿も浮かんでくる。	新　暦文
82		子のスマホ逃水を撮る旅路かな	高原ひろし
83		人の子と　競い高めよ　春麗ら	小山哲司
84		フジテレビ昭和時空や朧かな	絵夢
85		疾る影空に燕の流線形	一駄歩
86		霾（つちふる）や黒夜にそびゆ大古墳	遊児
87	破れ蓮 素風	菜畑の上にふうはり春の月 春のやさしい空気感が伝わる。朧な山家の景が想起される。	安田蝸牛
88	一葉 たくみ	コンペイトー噛めばほろほろ山笑ふ コンペイトーの噛んだ時の甘さと春の山の微笑みが共鳴している句。「ほろほろ」と山笑うは絶妙ですね。	くるみ
89		葉桜や帯締めきりり萌黄色	青木鶴城
90		春の雪明日は通院最終日	和田イチ子

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

91	允孝 寒立馬	老いの家人形無くも桃の花	桃の花がひっそりと活けられている様子がうれしいですね。春は誰にも来る。頑張りましょう。
92	大越 彩香	三叉路に迷ふ逃水捕らへけり	逃水が迷っているとは面白い発想。景も浮かび、季語の本意もよく突いて、その上、時間経過まで見える。
93	楽	地底よりいのち貰ひし桜かな	桜の美しさの源が感じられました。
94	かげろう	陽炎や海の彼方は夢の国	湾を挟んだ反対側から見えるのか見えないのか、季語が絶妙。
95	允孝	ぶかぶかの学帽児童風光る	今は学帽ではなくて野球帽ではないかとおもいますが、確かに新児童の場合は少し大きめの防止だったでしょうか。でも面白いと思います。
96	米山	雨に咲き風に散りたる桜かな	リズムが良い。
97		たくさんの友新しき夏初月	
98	風舎	ふり向けば浅き草むら雉走る	雉が、かさかさと走り去る景が浮かぶ。
99	しんい しーしー みづる	目が合ひしばかりに子猫うちの子に	目が合ったのも縁なんですよね。そして子猫と作者は幸せになりましたとさ。一目惚れしたのか、じっと見つめられ逃げられなくなったのか、ともかく家族の一員に、そしてすぐその中心となる予感。
100	あらか	母の勝ち遠足の日の象の尻	親子遠足だったのか、それとも象を見て母を思い出したのか――いずれにしても、たくましく頼れる「肝っ玉母さん」の存在を感じさせる一句です。
101		東西東西飲めや歌への花の宴	
102	暦文 風子 俳爺	口開けてアサリが笑う四月馬鹿	アサリが笑うの表現が上手い。上5中7及び作者が4月馬鹿そのもの。この句のようなことをアサリはしないがすると詠んだことが四月馬鹿なのである。
103	浪人	大将は舟唄すさみ蒸鰈	
104		画家は今やつと筆取り風光る	
105		遠山の薄墨花の並木道	

91	いさむ
92	光雲2
93	石関六弦
94	立野音思
95	小林土璃
96	龍野ひろし
97	ひろ志
98	山川充
99	俳爺
100	森下山菜
101	平野楽
102	霜里
103	河野凡士
104	大越マーガレット
105	朝香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和七年四月

106		山城やしばらく浸る花の道	秋谷風舎
107	くるみ	花あけび風にのりゆくリコーダー 季語の「花あけび」がお見事！	かれん
108	田猫	龍天に盆栽村はリニューアル 埼玉県の盆栽村か。季語が絶妙。	かげろう
109	一葉	つんつんと土突き生えるつくしかな 土筆の春を告げる成長が「つんつん」と「つ」の音の五つのリズムでうまく表現されている。	酒井癒香
110	幹子	南国の駅メロ流れ燕来る 燕は駅で巣作りするのをよく見かけます。駅メロも流れゆったりとした明るい南国の駅が目に浮かびます。	岡崎梗舟
111		近傍も競う桜のここかしこ	大束暮風
112		菜の花や川面に見ゆる鯉の群	総太郎
113	一葉 俳爺	さみどりの雨の滴や柳の芽 柳の芽を「さみどりの雨の滴」ととらえたのが手柄。さみどりのしずくが柳の芽という季語で生かされた。	後藤允孝
114		すべり台に立ちてさえずり近きかな	雪待月田猫
115	かれん 俳爺	夏はじめ水平線は模糊として 夏のはじめのぼんやりとした水平線に焦点を当てたところが良い。夏はじめだから当季の詠みではないが、水平線の様子はとらえている。	しんい
116	良月	着岸の船の一揺れ木の芽風 一揺れに風を感じました。	岡本たか子
117	しんい	代々と続く旧家の門桜 門桜、まだまだ元気で堂々たる姿が思い浮かびます。	佐藤幹子
118		清明の朝のびやかに床を出る	寒立馬
119		春風や回廊の下を素通りし	石川順一
120	田猫	目を貸しし記憶あやふや目借時 春眠の季節の実感がこもる、ユーモラスな句。	染谷風子